

千葉の園芸

発行所 千葉市中央区市場町1-1
公益社団法人千葉県園芸協会
連絡先 043(223)3005
毎月1日発行 1部 20円
平成26年5月号



園芸産出額全国第1位の
奪還に向けた
「力強い産地づくり」の推進

千葉県農林水産部生産振興課
課長 飯田 秀雄



平成26年度
全農千葉県本部園芸事業の
取り組み

全農千葉県本部
園芸部長 木村 浩

1 県計画における園芸振興について

本県の園芸産出額は1,994億円で、県農業産出額の約半分を占める重要な部門ですが、平成10年をピークに減少傾向にあります。一方、北海道や茨城県は野菜等の生産を強化しており、北海道が全国第1位となり、3位の茨城県との差は縮小しています。

そこで県では、平成29年度を目標年度とする「千葉県農林水産振興計画」を策定し、園芸産出額全国第1位の奪還を目標に掲げ、以下の取組を進めてまいります。

(1) 産地活性化と戦略的連携による力強い産地づくり

園芸産地自らが行う生産力や販売力を向上させる取組を支援するとともに、加工・業務需要など大口需要に対応できる生産・流通体制を構築するため、(公社)千葉県園芸協会を核に関係者が緊密に連携し「オール千葉」体制で力強い産地づくりに取り組みます。

(2) 高収益型園芸農業への転換

ハウスなどの施設化や省力機械等の導入による規模拡大、梨の改植による生産力強化及び集出荷貯蔵施設の整備による流通体制の強化を支援するとともに、新たな販路の拡大により、高収益型園芸農業への転換を図ります。

2 平成26年度の主な園芸振興施策について

(1) ちばの園芸産地活性化支援事業

(公社)千葉県園芸協会を核として、県、全農千葉、農協、市町村などの関係機関・団体が協同して取り組む「オール千葉」体制を構築し、産地間の連携強化による県産ブランドの確立や販売力強化に取り組みます。

(2) 新「輝け！ちばの園芸」産地整備支援事業

県内園芸産地の生産力を強化・拡大するため、パイプハウス等の施設整備や省力化機械等の導入、老朽化した温室等の改修に対して助成します。

(3) 園芸産地競争力強化総合対策事業

県内園芸産地の競争力を強化するため、国の交付金を活用して生産・流通コストの削減、省力化、高付加価値化などに資する施設・機械の導入に対し助成します。

全農千葉県本部は3か年計画における5つの基本戦略に基づき、販売力強化による組合員農家の所得向上や生産基盤の維持拡大に向けた担い手支援の充実・強化に取り組み、担い手支援と組合員農家の所得向上をはかります。

全農千葉県本部園芸部では、「JAグループ千葉 園芸生産者躍進大会」で宣言したとおり、「オール千葉」として、生産基盤を強固にし、安全・安心で美味しい青果物、愛情ある花きの生産振興と販売力強化、後継者の育成のため、次の重点実施策に取り組みます。

重点実施策

(1) 食の安全・安心対策の取組強化

「もっと安心農産物」生産・販売運動に取り組み「食の安全・安心」を確保します。

(2) JAと連携した生産振興の取組強化と生産組織の充実・再編

ちばの園芸産地活性化支援事業の活用・参画など県・関係機関と連携し産地活性化をはかるとともに、実需者ニーズに基づく加工業務用品目・重点振興品目・地域特産品目の生産振興をはかります。

(3) 園芸販売事業強化策の実践

パートナー市場との連携を強化し、実需者の求める販売ロットに対応するため、主要7品目を中心に販売事業強化策の実践に向けて、JA域を超えた広域での一元販売をすすめます。

(4) 系統結集による花き事業の強化

生産組織の再編と品質の平準化により、生産・販売の維持拡大をはかります。

(5) 直販事業の強化と販路の拡大

契約型産地の育成をはかり、生協・量販店等への供給拡大をはかります。

千葉県野菜品種審査会の開催について

千葉県生産振興課園芸振興室
副主査 石垣 賢治

平成 25 年度の第 61 回千葉県野菜品種審査会は、トマト、だいこん、食用ナバナ、にんじんの 4 品目で実施し、にんじん「ベーター441」(株式会社サカタのタネ)が農林水産大臣賞を受賞しました。平成 26 年度は、メロン、ねぎ、こかぶ、チンゲンサイの 4 品目で実施します。

○第 61 回千葉県野菜品種審査会の開催結果

千葉県野菜品種審査会は、県内の野菜産地に適した優良品種の選定と、野菜種子の素質改善や向上を通じ、県産野菜の品質向上と野菜産地の積極的な振興を図ることを目的として、昭和 27 年から開催しています。

平成 25 年度は、トマト、だいこん、食用ナバナ、にんじんの 4 品目で実施したところ、延べ 19 社から総計 94 点の出品があり、農林水産大臣賞をはじめとする 特別賞 5 点、金賞 5 点、銀賞 6 点が決定しました。(特別賞：表-1)

平成 26 年 5 月 19 日に、千葉市内において表彰式を開催する予定です。

【農林水産大臣賞】

にんじん「ベーター441」



表-1 特別賞入賞一覧

賞名	品目	品種名	出品会社
農林水産大臣賞	にんじん(秋冬どり)	ベーター441	(株)サカタのタネ
関東農政局長賞	だいこん(冬どり)	冬自慢	(株)サカタのタネ
千葉県知事賞	トマト(抑制栽培)	アニモ TY-12	朝日工業(株)
千葉県議会議長賞	食用ナバナ(冬どり)	SCO-001	(株)サカタのタネ
一般社団法人日本種苗協会長賞	だいこん(冬どり)	徳誉	みかど協和(株)

○第 62 回千葉県野菜品種審査会開催計画について

平成 26 年度は、メロン、ねぎ、こかぶ、チンゲンサイの 4 品目を対象に実施します。

審査会の開催場所、審査時期等は表 2 のとおりです。

表-2 第 62 回千葉県野菜品種審査会開催計画

品目	作型	は種期	審査期	ほ場地	担当機関
アールスメロン	ハウス半促成	3月上旬	6月下旬	館山市	農林総合研究センター 暖地園芸研究所 野菜花き研究室
ねぎ	秋冬どり	3月上旬	11月	山武市	山武農業事務所
こかぶ	秋冬どり	9月上旬	10月下旬	柏市	東葛飾農業事務所
チンゲンサイ	秋どり	8月下旬	10月上旬	旭市	農林総合研究センター 水稲・畑地園芸研究所 東総野菜研究室

「2 代目ガーベラ生産者のセミナー開催！！」

海匝農業事務所 改良普及課
主任上席普及指導員 松若 真由美

千葉県旭市、東庄町では昭和 60 年代から始まったガーベラ生産が盛んです(10 戸、3.5ha)。海匝農業事務所では香取農業事務所と連携して、2 代目を中心とした 8 名の若手生産者を対象に、研修会や相互ほ場視察、先進地視察による栽培技術や知識の向上と若手生産者のネットワークづくりを目的とした「ガーベラスキルアップセミナー」を開催しています。

1 旭市・東庄町のガーベラ生産

ガーベラは、周年を通じた収穫出荷ができ、後継者も多い切花品目です。しかし、販売単価の低下や生産コストの上昇、連作により反収は低下傾向にあります。また、個人出荷販売が多く、情報交換の場が少ない状況でした。そこで、若手生産者の課題解決能力向上とネットワーク作りを目指してセミナーを開催しました。

2 ガーベラスキルアップセミナーの取組

①連作障害対策と土壌消毒方法の研修会

太陽熱や土壌還元による土壌消毒方法についての講義と地域の生産者が行っている土壌消毒方法について情報交換を行いました。

②土壌診断の見方と施肥設計の研修会

各々の圃場の土壌分析を行い、それぞれのほ場の特徴や施肥設計の方法、ガーベラの養分吸収特性について学びました。

③病害虫防除研修会

難防除害虫類の生態と、物理的防除の方法、農薬の分類について学びました。地域の生産者も参加し、各自の事例について情報交換を行いました。

④相互圃場視察

当年定植したほ場を中心に、相互ほ場視察を 4 回行いました。各園での改植方法の違いによる夏越し後の生育状況、液肥管理と灌水方法、暖房温度の設定方法、病害虫防除とテーマを決めて比較することで活発な意見交換ができました。

⑤先進地視察研修

ガーベラの全国一位の産地である静岡県の視察を行いました。病害虫の初期防除方法や肥料切れを起こさない養液管理、猛暑対策の徹底などにより、生産性の高いほ場を見学し、技術向上意識の高い生産者の話を直接聞くことができ、今後の刺激となりました。

3 スキルアップセミナーの成果

年間 8 回の集合研修を通して基礎的な知識を再確認し、戸別巡回で各々の圃場の問題点や解決方法を生産者同士が対話・検討することで、病害虫被害が軽減され顕著に生産性が向上したメンバーもあり、問題解決能力が高まりました。また、それぞれが培ってきた技術情報について活発に意見交換ができるようになり、若手生産者のネットワーク化が図られました。

4 今後の取組

次年度からは各自が明確な目標を持ち、地域内外の生産者と情報交換を図りながら課題解決策を確実に実行できるよう支援していきます。また、価格安定を図るために、販売先の情報収集をグループで取り組み、強いガーベラの産地化につなげたいと考えています。



これからの千葉県のガーベラを支えるメンバー

ハウス抑制裁培トマトの TYLCV 抵抗性優良品種の選定

農林総合研究センター 野菜研究室
研究員 佐藤 侑美佳

県内全域で問題となっている黄化葉巻病 (TYLCV) 対策として、黄化葉巻病抵抗性品種の導入が検討されています。そこで、昨年行った第 61 回千葉県野菜品種審査会 (抑制トマトの部) の結果をご紹介します。

1 はじめに

千葉県のトマト生産は、県内全域で周年生産されており、平成 24 年は作付面積が 834ha、産出額 158 億円と、全国でもトップクラスです。しかし近年、黄化葉巻病が多発し、安定生産を脅かしています。対策として、0.4mm 目合いの防虫ネットの展張や、コナジラミへの薬剤散布等が推奨されていますが、完全に防ぐことは出来ません。また、防虫ネットの展張によりハウス内が高温になる等の弊害も出ており、抵抗性品種への期待が高まっています。そこで、本県トマトの主要な作型であるハウス抑制裁培において、トマト黄化葉巻病ウイルスに抵抗性を持つ優良品種の選定を行いました。なお、この試験は、第 61 回千葉県野菜品種審査会 (トマトの部) として実施しました。

2 優良品種の条件

黄化葉巻病に抵抗性を持つ優良品種の目標として、多収で、裂果や空洞果の発生が少ない、草勢、着果が安定している、糖度が高く食味が良い等の特性を有したものとし、審査を行いました。

3 審査結果

出品された 10 品種のうち、上位 3 品種は、「アニモ TY-12」(朝日工業 (株))、「SYTM004」(シンジェンタジャパン (株))、「TY みそら 86」(みかど協和 (株)) でした。

これらの黄化葉巻病抵抗性品種は、草姿がよく、いずれの品種も参考品種の「桃太郎グランデ」に劣らない収量性と糖度の高さを持っており、抑制裁培で特に問題となる裂果の発生率も低いことが明らかとなりました (表、図)。

従来の抵抗性品種は、乱形果や裂果が多く発生するなど、栽培が難しいとされていましたが、今回出品された抵抗性品種の多くは、栽培しやすく、普及性の高い優良品種であると考えられました。

農林総合研究センターでは、今後も黄化葉巻病対策を検討し、情報提供を行っていく予定です。

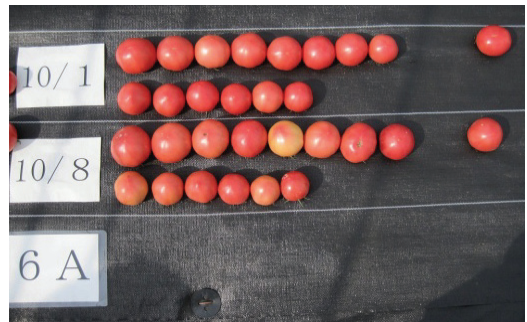


図 「アニモ TY-12」の収穫物の様子

表 審査品種の収量、糖度、くず裂果発生率

審査 番号	品種名	収量 (g/株)					平均 1 果重 (g)	糖度 (Brix%)	くず裂果 発生率 (%)
		可販果		可販果 合計	規格外	総収量			
		上物	下物						
1		1,611	533	2,144	1,100	3,244	132	4.8	30
2		1,149	746	1,896	1,029	2,925	132	4.4	34
3	TYみそら86	1,713	835	2,548	1,422	3,970	169	5.0	31
4		2,106	1,036	3,142	660	3,801	145	4.7	17
5	SYTM004	2,447	840	3,287	875	4,161	178	4.6	19
6	アニモTY-12	2,717	609	3,326	699	4,025	149	4.5	17
7		1,355	721	2,076	1,147	3,223	135	4.8	36
8		2,399	919	3,319	931	4,250	182	4.5	20
9		2,797	320	3,118	634	3,752	168	4.7	13
10		998	782	1,781	2,173	3,954	159	4.9	50
参考	桃太郎グランデ	2,416	1,040	3,455	1,169	4,624	178	4.4	24

加工・業務用野菜の取引拡大に向けて
～新農業ビジネスモデル構築事業の調査結果～

千葉県流通販売課 販売・輸出促進室

県では、近年伸びているサラダ、惣菜などの加工・業務用需要に対応した野菜の生産を進め、取引の拡大を図るため、ヒアリング等による実需者の県産野菜に対する意向調査、新たな事例に対応した産地の事例調査を行い、農業所得の向上につながる新たなビジネスモデルを検討しました。

1 実需者の意向調査

実需者はカット野菜、サラダ・惣菜事業を中心に、今後も事業拡大する意向が強く、県内野菜産地との契約取引の拡大を求めています。

県内産地と実需者との契約取引の事例は少ないものの、県産野菜は、市場経由で加工・業務用に利用されています。

だいこん、キャベツなど、市場流通と異なる出荷形態を求める事例がありますが、品質・規格・取引条件について、現時点では細かな条件提示をする実需者は多くありません。また、実需者は県内産地の情報が少なく、情報交換の場を求めています。

2 県内産地の事例調査

県外では、農業法人が広域的に生産者を組織化して周年出荷体制を構築し、実需者と契約取引を行う事例が見られます。また、JA及びJA県本部が部会組織を強化し、市場出荷に加え、加工・業務用に対応できる産地化を進める事例があります。一方、県内産地でも、若手農業者を中心に、意識が変わりつつあり、加工・業務用を経営の選択肢の一つとし、規模拡大により所得向上を図る事例が見られています。

3 取引拡大に向けた産地の課題

実需者の業態により、求められる品目や納入条件の違いがあるため、首都圏にある産地の強みを生かし、実需者ごとの生産出荷体制や物流手法の構築が求められます。

生産面では、コンテナ利用や規格簡素化など出荷作業の効率化によるコスト低減、収穫機械の導入、ロットの確保が必要です。

流通面では、出荷数量調整や簡易な一次加工を行うためのJA等の施設整備や産地のリレー出荷体制が求められています。

販売面では、JA等の専門部署の設置やリスク回避のための中間事業者（産地と実需者の間の需給調整を行う事業者）との連携が必要です。



鉄コンテナの利用による流通コストの削減

4 新たなビジネスモデルの提案

千葉県における取引推進のビジネスモデルを2つに区分し提示しました。

① 大規模生産者モデル

大規模農家を核とした生産者のネットワーク化やJA・企業の共同出資による法人の設立。

② JA部会モデル

JAには、加工・業務用に取り組む生産者の組織化や販売体制の強化。JA県本部等による集荷・販売ステーションの整備。

5 加工・業務用取引の取引拡大に向けて

食の簡便化志向が高まり、中食産業の規模が拡大傾向にあり、本県の野菜産地にとって、加工・業務用取引は必要不可欠となっています。

加工業務用取引は、定質・定量・定価・定期を基本とした契約取引で、価格は生鮮用に比べ安い場合が多いですが、安定した売上げが見込め、出荷経費の削減ができるメリットがあります。

今後に向けては、産地と実需者が数年先を見据えて、信頼関係を構築していくことが重要です。

県では、加工・業務用取引の一層の拡大を図るため、産地と実需者とのマッチングの支援、JA等の生産者組織による産地活性化の取組の支援、産地育成に必要な省力機械の整備の支援などを進めています。

野菜等の出荷箱に
「チーバくん」を活用できます！

流通販売課 販売・輸出促進室
主事 加藤 恭葉

千葉県のマスコットキャラクター
「チーバくん」

県への手続きを行えば、原則無償で野菜等の出荷箱にチーバくんのデザインを使用することができます。

一部地域では既に活用していただいている事例もあり、「チーバくん」のロゴ入り出荷箱は、県産農林水産物であるPR手段のひとつとなっています。

温暖な気候と豊かな自然に恵まれ、様々な農林水産物が生産されている千葉県。県産農林水産物の販売促進活動の一環として広く活用してみてはいかがでしょうか。

詳しくはお問い合わせください。



【問合せ先】
県流通販売課販売
輸出促進室
千葉市中央区市場町 1-1
043-223-3085

「フード・アクション・ちば」の
期間を延長しました

流通販売課 販売・輸出促進室
主事 加藤 恭葉

県では、県産農林水産物のより一層の消費拡大と知名度向上を図るため、県民運動として「フード・アクション・ちば」を提唱しています。

平成26年3月末までとしていた活動期間を、平成26年4月以降も継続していくこととし、本活動に賛同いただける企業・団体を推進パートナーとして随時募集していきます。

また、この取組を効果的に推進するため、推進パートナーが利用できる専用ロゴマークを作成しており、県産品を使った商品や販促資材へ無償で利用することができます。

専用ロゴマークは全部で12種類用意し、幅広く活用していただくことができます。

詳しくはお問い合わせください。



【問合せ先】
県流通販売課販売
輸出促進室
千葉市中央区市場町 1-1
043-223-3085